

究活動を支えていただいたすべての方々に、心より感謝申しあげるとともに、皆様の今後の御発展を祈念いたします。



詳説 物理化学 Monograph シリーズ (冊子版) の表紙

感謝

化学科 (自然科学研究支援開発センター)・教授
中 島 覚

学位を取得し、何年間かのポストドクを経てからの採用でしたので、広島大学理学部には感謝しかありません。着任時は東千田町のキャンパスで過ごし、元附属小学校を使った学生実験も良い思い出です。新年度が始まり、オリキャンで宮島に行ったことも楽しい思い出です。当時は全学でのオリキャンで、学生さんがしっかり準備をして開催して素晴らしいと感じました。その後東広島キャンパスへの移転があり、研究室立ち上げも楽しい思い出です。学生さんと一緒になって実験を行いました。数年後、教授が転出されましたので、新設されたばかりのアイソトープ総合センターに移動することになりました。移動後の最初のミッションは建物の増築でした。幸い、センター長や理学部事務の全面的なサポートのおかげで、概算要求から監督官庁への変更申請など大変でしたが、スタッフ皆で達成したことも良い思い出です。

学内の研究支援施設が自然科学研究支援開発センターに統合されてからは、事務は本部が担当することになりました。理学部との縁は薄くなり、「放射化学」の講義や関係する研究室との繋がりのみになりました。教授昇任後は化学科の教授会に参加するようになり理学部との縁が戻ってきました。センターの仕事と理学部の仕事を両立することは容易ではありませんでしたが、自身がなすべきことを確認する機会でもありました。また大学院リーディングプログラム (LP) の学生を多く引き受けましたが、社会人学生や留学生の学位取得に関して理学部からは講義の進め方など大変大きな支援をいただきました。私自身の化学研究のテーマと LP の学生のテーマが少し乖離して苦勞しましたが、両者を進めているうちに新たな研究テーマに

出会い、新たな境地に到達できたとさえ思っています。

A blessing in disguise というのは、不幸に見えたものが本当は天啓であるという意味です。私自身のこれまでの研究環境は十分であったとはいえませんが、それだからこそ多くの皆様のご支援のおかげで様々なことを乗り越えることもでき、さらには楽しむことさえできました。理学部での研究環境はこれから苦しくなっていく面もありますし、教育研究以外にも尽くさねばならないことも増えると思いますが、今後も自身の興味に従って研究を進めるという理学部らしさを大切にしながら、教育研究に励んでいただければと思います。



留学生よりいただいた
A blessing in disguise の楯とともに

良質の部分を伸ばす ～広島に来て、あれから43年～

生物科学科 (両生類研究センター)・教授
三 浦 郁 夫



カエルを丸ごと使った遺伝学がしたい。その強い思いから、1981年に広島大学の門を叩きました。当時6月、ちょうど梅雨の真っ盛り大学院試験の下見のために両生類研究センターを訪れ、残念ながら研究室や飼育室は見せてもらえませんでした。青森から出て来て、さすがに手ぶらで帰るわけにはいかないと思い、建物の裏にある野外の飼育場をこっそり見に行きました。仕切りの金網に顔を擦り付けながらコンクリート水槽を覗き込むと、大きな、とても大きな黄色いウシガエルのアルビノが何匹もドスンドスンと飛び跳ねていたのです。驚きました。オタマジャクシから育てたのは間違い無い。やはり、ここにはカエル丸ごと遺伝学の